

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 中島隆博

本論文『残響の中国哲学——言語と政治』は、第1部「言語と支配」、第2部「起源と伝達」、第3部「他者の声」という三部構成のもとに、哲学思想における言語と政治との関係という問題を、中国哲学を中心として解明したものである。

第1部では、古代中国において論じられた言語に関する哲学論争が考察される。先秦時代の『荀子』の言語論における「正名」の観念の検討から始まり（第1章）、六朝期の「言は意を尽くすのか否か」という論争（第2章）、『莊子』における初源の「声」への信の問題（第3章）などが細密な手続きで次々に論じられた後、儒家の「正名」と道家の「無名」の議論を、墨家と法家を含むより広い文脈に位置づけ直し、古代中国における言語論のもつ政治的な意味の探求が試みられている（第4章）。

第2部「起源と伝達」では、六朝から近代に到るまでの中国の文学理論とそれを支える形而上学が主題となる。まず、中国文学理論の一つの極北をなす劉勰『文心雕龍』が取り上げられ、言語の他性を「奇」として取り込み、詩文の装飾性と固有性を同時に豊かにしようとした劉勰の議論が、「明喩」に対する「隱喩」の優位として考察される（第5章）。続いて、言語の起源に〈自己〉を指定する韓愈の「自己発出」の形而上学、それを受け継ぎつつ、「格物致知」の概念の援用によって、外界の「理」を窮めることで形而上学の伝達可能性を確保しようとした朱熹の議論が検討される（第6章）。ただし、両者が構想した理想的な共同体において、自己発出の形而上学を共有せず、自己啓蒙による救済を拒むような他者が不在であるという点に、批判的な留保が残される。

第2部の締め括りとして、言語論におけるこの形而上学と他者の問題が、近代中国における胡適の〈白話文〉の主張にいかなる「残響」を響かせているのかが考察される（第7章）。そして胡適が歴史の「自覚」の哲学として構想した「中国哲学史」においてもまた、この「自覚」を共有しない他者が依然として排除されることになるという点が鋭く抉り出されてゆく。

第3部では、これまで見てきた、言語を支配することと、特定の〈われわれ〉の共同体を作り上げる政治に抗して、「他者に声を返す」可能性が、西欧哲学への参照によって模索される。まず、「形而上学と哲学の武装解除」を行い、複数の平等な他者たちが声を交換する公共空間を構成し直そうとしたハンナ・アーレントの政治哲学（第8章）。さらに、〈他者のために〉という倫理の次元を切り開き、〈私〉の無限の責任を論じるエマニュエル・レヴィナスの哲学（第9章）。この二つの参照軸の導入によって、「中国哲学」と「西欧哲学」とが交差し、「言語と政治」をめぐるそれぞれの問題系が共鳴し合うさまが記述されるこの二つの章は、本論文の方法とアプローチの独創性がもっとも発揮された箇所と言えよう。

最終章ではふたたび中国に戻り、他者との共生を可能にする「別の空間」の可能性が、魯迅の言語論と文学論のうちに探られる（第10章）。そこでは、魯迅の終末論的な思考をレヴィナスの「語ること」と「メシア的平和」に重ね合わせつつ極限まで推し進めるとき、母性という魂のあり方が魯迅の小説解釈を通じて垣間見られることが示される。

本論文が古代から近代に至る中国思想の大きな地平から取り出してきたのは、中国哲学は一貫して言語の支配という政治を夢見ることによって、未聞の他者の声である「弱い声」をかき消してきたという命題である。伝達可能性を保証する公共空間において、呟きや口籠もりといった「弱い声」はあらかじめ排除されている。その排除の構造を歴史的に炙り出しつつ、いかにして「弱い声」に耳を傾けうるのか、中国哲学に内在する微かな「残響」をいかにして聞き届けうるのかを問うこと。本論文はその問いの実践を通じて、中国哲学をマイノリティのための「マイナー哲学」（ドゥルーズ）として再編成しようとする野心的な試みである。

本論文は、一方で、中国の歴史的な文脈における「言語と政治」の問題を、従来までの研究成果の総合によって歴史的に解明する第一級の文献学的業績である。しかし他方、西欧哲学との突き合わせを通じて、中国的文脈から「哲学」の存立それ自体を問い直すという高度な問題設定に答える、斬新かつ強力な思考の冒険でもある。それは、一見、デリダ的「脱構築」によって中国哲学の思惟を一方向的に批判する企てであるかに見えかねないがそうではない。むしろ、中国哲学と西欧哲学とを同一の問題系を共有するいわば「共犯者」として捉え（このこと自体、前代未聞の力業である）、そのうえで両者ともどもの批判的な解体を企て、両者に共通する「他者の排除」という罍からいかに脱しうるかという問い

をめぐって、徹底的な考究が展開されていると言うべきであろう。

形而上学から歴史的現実へ、閉ざされた民族共同体から開かれた普遍空間へ、固有性のアイデンティティからヘテロジーニクスなマイナー性へ。これら三つのベクトルに沿って駆動され、言語にまつわる倫理性と政治性の諸相をめぐって展開された本論文の考察の成果は、今後、中国哲学の研究者にとって欠くことのできない指針となるだろう。

審査会では、批判と解体を経たうえで提起されるべき肯定的命題がやや具体性を欠いているという点、アーレントとレヴィナスの読解の仕方にやや問題があるという点など、幾つかの疑義が提出されたが、それら小さな瑕疵は、独創的にしてスケールの大きな本論文の本質的価値を損なうものではないという点が最終的に確認された。

以上をもって、本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。